

番外謡曲「聖光寺」について

三 谷 幸 子

はじめに

番外謡曲の紹介については、明治以降、安田善之助・横山仙人・丸岡桂・和田維四郎・斎藤香村・三上進・高安六郎・川瀬一馬・江島伊兵衛・表章・田中允などの諸氏先学によってその研究が進められ、貴重な文献が数多く残されている。

特に田中允氏の「番外謡曲・角刈本」(正統二冊・古典文庫・昭和25年3月)昭和27年3月刊)につづく「未刊謡曲集」(古典文庫・昭和38年9月)昭和45年7月刊)十六巻にわたる七百三十四曲の詳細な解題と翻刻紹介、表章氏による「鴻山文庫の研究・謡本の部」(わんや書店・昭和40年3月刊)に紹介された番外謡曲の写本の書誌学的説明、また、国語国文学研究史大成第八巻「謡曲・狂言」(三省堂・昭和35年6月刊)における多くの文献、国書総目録第六巻(岩波書店・昭和44年4月刊)に示された「能の本」の紹介、近くは「樟陰国文学」7号(大阪樟陰国文学会・昭和45年3月刊)に発表された西畑実氏の「大西家蔵・番外謡曲について」など、雑誌・論集に発表された多

「聖光寺」について

くの番外謡曲がある。

謡本「聖光寺」は番謡のような高度の謡曲ではないが、私の管見に入った限りでは、まだ翻刻紹介がなされていないと思われるので、所蔵者田中重太郎博士のお許しを得て、ここに発表させていただくことにした。

一

謡本「聖光寺」田中重太郎博士蔵本は、縦二十四・五糎、横十七・三糎、墨付十七葉、一葉五行書(一面のみ四行書)一行字数十三字前後の袋綴本である。表紙は濃い緑色で地模様があり、題簽はない。第一面の裏面に「聖光寺」と記され、右下に「水海トモ」と少し小さく書かれている。用紙は美濃版のすぎはら紙である。奥書に「文化十四歳丁子春写之」とあり、おわりに「此本何方へ参り候共早々御かへし被下候文政三辰三月改之今井米七」とある。作者はしるされていない。

一

「聖光寺」について

聖光寺は京都市下京区寺町通りに現存する浄土宗鎮西派の寺院である。現在は「ショウコウジ」と呼んでいるが、謡本では「聖」を「セイ」とよんでいる。寺の本尊は阿弥陀如来であり、寺宝として清海曼荼羅と嵯峨式釈迦如来像（鎌倉期作）、大紹正宗国師額（天保八年尊超法親王筆）がある。

聖光寺は錦綾山曼荼羅院とも称し、浄土宗鎮西派根元の地である。元久元年に仏師康慶が開基となり、鎮西聖光上人を開山として創建された。天明の大火と天保三年の火災で焼失したが、華頂宮尊超法親王が大施主となり再建し、現在に至っている。境内には天野屋利兵衛（綿屋善右衛門）大石良雄実母の墓がある。

二

謡本「聖光寺」は江戸後期の作と考えられる。現任職小林忍戒師のお言葉によると「この謡本は当寺には伝わっていない。また、そうした記録もないが、清海曼荼羅は後年の作ではあるが寺宝として今もなお保存されている。寺院の記録によると鎮西上人六百年回忌が文化十一年（一八一四）に盛大におこなわれた由が記されている。」とのことなので、この謡本が文化十四年（一八一七）に今井米七なる人によって筆写されたとする、おそらく鎮西上人六百年回忌にちなんで、文化十一年頃にこの謡曲が新作されたものと考えられる。

表章氏は「鴻山文庫の研究」（わんや書店・昭和40年3月刊）の番外謡曲の項において「江戸時代には、新作謡曲がおびただしく作られ

二

ている。番外謡曲家として知られる田中允氏は江戸時代の新作曲数を『千五百番内至二千番』と考えておられるが、そう狂いがある見通しとは思われない。——中略——謡が普及した結果、寺社の縁起や地方各地の名所旧跡にまつわる伝説や有名な逸話などを謡曲の形式に綴って、自己の創作欲を満足させたり、教義や名所の宣伝に用いようとする好事家が後を絶たなかったものらしい。謡物の新作は番綴の新作よりも容易であり、これも盛に行われたらしい。」と述べておられるが、謡本「聖光寺」も江戸後期にこうした寺社縁起を目的としてつくられたもの一つと思われる。

寺社縁起ものが盛に新作された例をみると、現行曲・番外謡曲を含めて今日まで「寺」を題目としている謡曲は七十曲余りに達している。このほかに寺院名を題名としないで寺社の縁起を扱ったものも数多いと思われる。

三

つぎに、謡本「聖光寺」の資料となっている「聖光寺縁起」と「清海曼荼羅」についてのべる。

聖光寺縁起についての記録は古くからあるが、筆者の管見に入ったものは聖光寺において拝見させていただいた「鎮西國師舊跡聖光寺縁起」のほかに、つぎのものがある。

版本・拾遺都名所圖會・平安城の巻 皇都書林 天明7年末秋
新撰京都名所図會・巻四 竹村幸則 白川書院 昭和38年6月

新修京都叢書（卷十・十二・十六・十九・所収）

光彩社 昭和42年

新修京都叢書（卷四・十六所収） 野間光辰編 臨川書店 昭和43年

紙面の都合で全文を紹介することができないので、版本・拾遺都名所圖會と聖光寺で拝見させていただいたものだけを転載させていただく。

聖光寺

同街（京極通）綾小路の南にあり浄土宗一心院に属す四十八願巡の第四十二番なり開基良阿上人「本尊阿弥陀仏」立像三尺許初は丹波国桑田郡篠村八幡宮の御本地仏なり天正年中良阿上人八幡宮の靈夢を蒙りこゝに安置す

『清海曼陀羅』むかし蓮の糸にて織りたる絹に清水寺の観音化人と成り曼陀羅を図して和州の清海上人にあたへ給ふ靈器なり後世南都の絵師高天法眼が家に伝ひある所当寺の良阿上人春日明神に詣しかの法眼が宅に宿しぬ法眼法門を聴受し安心決定のうへ此曼陀羅を上人に寄附せり

天明七年末秋辭板

（版本・拾遺都名所圖會 皇都書林所収）

鎮西國師舊跡聖光寺縁起

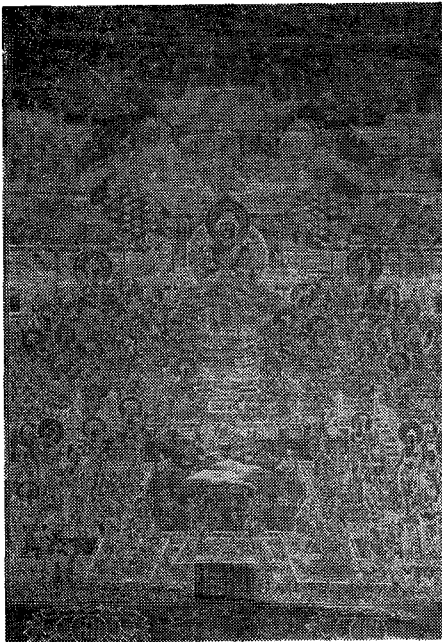
当山は昔後白河法皇の御勅命により、三十三間堂の観音菩薩を彫みし大佛師康慶が草庵の舊地なり。曾て吾宗の第二祖鎮西大紹正宗國師（聖光上人の贈號）鎮西の名刹明星寺五重塔の再建に方り、其本尊の彫刻を康慶に依頼し、暫らく同庵に滞留して吉永禪坊の、元祖大師に

「聖光寺」について

面謁し浄土の法門を問ひ給へり。其時大師一見して直に法器なるを知り、三重の念佛を説き給ふに辭辨廣博教誨時を移し、未の刻より始めて子の刻に至る。國師大に其説に感じ遂に師資の禮をとり給へり。時に大師六十五歳國師三十六歳なり。國師は康慶が後園に小庵を結び、建久八年より元久元年まで首尾八箇年、日日吉水に詣で浄土教義の蘊奥を究め、「源空が所存は御邊に傳へ畢んぬ」との證明の言を得給へり。斯て國師は念弘道の重任を荷ひ、鎮西に歸り給はんとするや、康慶その徳を慕ひ、特に別離を悲んで國師自筆の眞影を乞ひ、之を奉安して聖光庵と號す。今當山に傳ふる所の眞影は即ちこれなり。其後天正十一年中興良阿上人深く流祖の舊跡を慕ひ、勢州樹敬寺を辭して聖光庵に至り堂宇を再興し錦綾山聖光寺と改む。―後略―とある。

昭和十二年三月

聖光寺三十三世 堅譽 良英 謹識



清海曼茶羅

聖光寺清海曼茶羅は平安時代の長徳二年（九九六）の成立といわれているが、原本は失われて、現在は江戸時代のものがあり、寺宝として春秋の彼岸には一般に公開されている。

筆者が最近拝観させていただいた聖光寺に伝わる清海曼茶羅は、濃紺地金銀泥画で、画面は縦一九三糎、横一五七糎で二本ある。一本は慶長十五年（一六一〇）で天和三年（一六八三）に修理をした旨の裏書きがあり、他の一本は享保十一年（一七二六）に写したという年紀がしるされている。しかし、享保年間に写したといわれるものの方が傷みがひどかったので、慶長年間のものカメラにおさめさせていただいた。

清海曼茶羅については、聖光寺に伝わる一卷「洛陽聖光寺清海曼茶羅縁起」があり、また、「日本美術12」・浄土教画（昭和44年12月・至文堂刊）に岡崎護治氏が詳しく述べられておられるので、これを抜粋して転載させていただくことにする。

清海曼茶羅

智光曼茶羅・当麻曼茶羅とともに浄土三曼茶羅と呼ばれる一つがこの曼茶羅である。この曼茶羅は清海という僧が感得したというところからこの名があり、その比較的古い作品が奈良極楽寺に伝わっていて著名であったが、今は転じて奈良国立博物館に蔵されている。清海という僧の伝暦は必ずしも詳でないが、ほば藤原道長や恵心僧都たちと同時代の人で寛仁元年（一〇一七）に没している。——中略——この奈良国立博物館蔵本は清海曼茶羅とはいい難く、むしろ智光曼茶羅などに近い阿弥陀浄土変相図の一異

本と見るべきものである。しかし製作は平安後期と認められ、浄土変の中でも稀品に属することはいうまでもない。

ところで京都聖光寺・宮城成覚寺・奈良櫛羅浄土寺などには絹本の紺地金銀泥画の清海曼茶羅がある。その図の内陣の中央下辺には銘文があつて、それによると清海が功を終えて箱に収めんとしたとき蓮華座が現われたので、これを図の外陣にあらわしたというもので長徳二年（九九六）十月二十二日の年紀がしるされている。文面の通りこれらの清海曼茶羅の外陣には計十六個の蓮華を金銀交互に配置しており、各蓮華内には観經十六觀の意をあらわす偈文を記している。これは明らかに清海曼茶羅と観無量寿經との関連を示すものであつて、したがつて、清海曼茶羅は当麻曼茶羅系の一変種だといふことができる。同時にこの蓮華座による十六想觀の偈文を外縁につけること、紺地金銀泥絵であることなどは沙門清海の創意を汲むべきであろうし、清海曼茶羅の大きい特色でもある。

さて清海曼茶羅の成立は平安時代の長徳二年（九九六）とすべきであろうが、これを実見した記録としては鎌倉初期の建久二年（一一一三）に興福寺実叡が建久巡札記にしろしたものや降つて応永三十四年（一四二七）に芝増上寺の開基西管上人が当麻曼茶羅疏に書き残したものなどで平安朝には遡らない。観徹が正徳二年（一七一二）に選述した清海曼茶羅合讚によるとこの超昇寺にあった清海曼茶羅の原本は天正年間の兵災のときに流伝して京都聖光寺に遷つたとある。そしてその時期に袋中良定（一五四四）

一六三九)の浄土第三曼荼羅記によると、聖光寺中興良阿上人の時であったという。しかし、現在聖光寺に伝わる清海曼荼羅は後世のものであるから、原本は天正の兵火に遠からず南都で焼失したと考えるべきであろう。現存する清海曼荼羅の図柄は細部を詮索すれば各本で小差はあるが、構図の主要部は全く同じで、当初の清海曼荼羅の図相をほぼ忠実に写し伝えて来たものと推察される。西誉が応永三十四年に原本を拝見したときに紺地泥絵であったことを記すことなどもこれを裏付けるものである。内陣の構図は智光曼荼羅と当麻曼荼羅の中間的なもので、仏菩薩の数も智光曼荼羅よりは多く複雑である。——後略——

四

謡本「聖光寺」の役柄・構想・梗概についてしるす。まず、役柄については、ワキ役は旅僧であり、前シテは庭を清める老僕、後シテは清水寺の観世音菩薩である。

構想は聖光寺に寺宝として伝わる「清海曼荼羅」の縁起を中心に、仏道修行に精進する僧に対して二度までも時代を経てこの世に顕われ、奇特をほどこす清水寺観世音の靈験を謡いあげたものといえよう。つきに、梗概についてしるすと、ワキ役の旅僧が天下に名を知られる浄土三曼荼羅「智光・当麻・清海」のうち清海曼荼羅だけをまだ拝むことが出来ないで、清水寺に参籠して祈願していると、やがて、靈夢をこうむり、急ぎ京極の聖光寺に宿願の曼荼羅をもとめて参

「聖光寺」について

詣する。そこで、旅僧は寺の庭を清めている老僕にこのことを告げて案内を請うと、老翁は旅の僧を方丈に案内し、清海曼荼羅のいわれを語りはじめ。すなわち、清水の観世音が沙門清海の仏道修行の志に感じ、一夜のうちに曼荼羅を書き与えたことを語るのである。しかし、旅僧は「大和の国超昇寺の住呂清海上人に与えられた曼荼羅が、どうして京洛の地である京極の聖光寺に現存するのか。」と重ねて問いたです。老翁はさらに言葉をつづけ、「天正中に良阿上人が聖光寺を中興したが、この上人は専修浄行の聖でいらつした故に、高間法眼という人が帰依渴仰のあまりに秘蔵の清海曼荼羅を良阿上人に奉り、また、良阿上人が菊岡西照という人に招請された折、これを庭上の松にうち掛けて礼拝し、講説をつづけていると、ちはやぶる神も御法を楽しんで春日の山から来現なされたことがある。そして、清海曼荼羅はこのように尊く世に伝わったが、やがて、超昇寺は戦火によって焼失する。しかし、清海曼荼羅は奇しくも残り、今日に至るまで京極聖光寺の寺宝として保存されている。御身の仏道修行の心に感じて、それを教えるためにこの世に姿を顕わしたのである。」と語って老翁は消え失せる。(本文中に『中入り』の文字はないが、普通能楽ではここでシテ役は中入りとなる。)

御仏に向って旅僧が念仏していると、やがて、須弥のうてなの中より妙なる御声が聞え、齡八十をこしたと思われる老僧が鳩杖に携ってあらわれ「昔沙門清海に仏道修行の真の心を感じ、九品浄土の曼荼羅を書き与えたが、今また、清海曼荼羅を拝むことを願う信心な修行僧に逢いその願いを叶えた。弥陀が本願の往生疑いなし。衆生にこれを

五

「聖光寺」について

利益せよ。」とて、たちまち千手観世音菩薩の姿をあらわして音羽の山に消え失せてしまふ。旅僧はあまりの有難さに幾度もくく礼拝し、また、仏道修行のために旅立って行くのである。

五

謡本 聖光寺 (翻刻)



六

- 一 本文の行数・字詰・振仮名の位置は原文のままであるが、濁点の必要などところにはこれをつけておいた。
- 一 本文に加えられた節附は省いたが、節附の名称・次第・下歌・上歌などは謡本にしたがって記した。また節附は「印とし、詞は「印とした。
- 一 本文のあきらかに誤りと認められたものは「※」として下欄に記した。
- 一 章句中における「註」は本文の下欄に記し、現行曲の謡本中における用例については、(謡・出典名)として記し、その後引用例をあげた。

次第へおしへうれしき法の門。
和
くく開くる

道に出でふよワキ詞「是は諸國行脚の

僧にて候。我國々を廻り。靈佛

寶普く拜み奉りて候。又爰に

一 法の門―法とは仏法。仏の教え。法の門とは仏に回向をたまわること。(謡・経政) 日々夜々の法の門貴賤の道も普しや

二 智光―智光曼荼羅。浄土三曼荼羅の一。元興寺の智光が感得した曼荼羅で、成立は奈良時代中期。浄土曼荼羅の中最も古く、その第一曼荼羅と称せられている。この曼荼羅の名がみられる記事は、日本

靈異記・日本往生極楽記・往生拾因・今昔物語・扶桑略記・水鏡などである。

三 當麻―當麻曼荼羅。浄土三曼荼羅の一。無量寿経や阿弥陀経にもとずく阿弥陀浄土變相図に觀無量寿経の思想教法が附加された形式をとるもので、古今著聞集卷二・元享釈書第二八・當麻曼荼羅縁起によつても有名である。謡曲「當麻」の素材となっている。

四 清海上清海曼荼羅。浄土三曼荼羅の一。前述。

二三四 智光當麻清海とて。天下に隠れ

なき三の曼陀羅あり。智光當

羅 麻は拜し申候へ共。清海の曼陀

は何くにか有やらん。未拜み申

候へは。此度清水の觀世音に参

籠

申候へば。あらたなる御異夢を

候程に。是よりすぐに京極聖

光寺へと急ぎ候。道行へ音羽

山高き

臺を立おりて、車やどり馬

とどめ。とまらぬ足に任せつゝ。

五 清水の觀世音―清水寺の千手千眼觀世

音菩薩（千手千臂觀世音菩薩ともいう）

のこと。清水寺は京都市東山区にある北

法相宗の總本山。西国三十三所の第十六

番札所。西暦七九八年坂上田村麿呂の建

立。「セイスイジ」「キヨミデラ」とも

いう。謡曲「田村」の素材になつてい

る。千手觀音とは六觀音の一で、阿彌陀

如来の左の脇土として大慈大悲をもつて

十方世界に身を現じ、世人のその名を称

する音声を観じて皆解脱せしめる菩薩。

六 京極聖光寺―京極綾小路の南にあたる

のでこのように呼んだ。詳しくは聖光寺

縁起に前述。

七 音羽山―京都市東山三十三峯の一。清

水寺のある山。清水寺の山号。（謡・盛

久）音に立てぬも音羽山（謡・田村）霞

むそなたや音羽山（謡・西行秘）松吹く

風の音羽山（謡・花月）音羽山峯の下枝

の滴りに

八 高き臺―「須陀の臺」（六七に後述。）

と同じ、「蓮台」の「台」と音羽山の「

山」とをかねた。

九 車やどり馬とどめ―「車やどり」とは

寝殿造りの屋敷の中門の外にある牛車を

入れておく建物をいうが、ここでは車を

寄せてしばらく牛車を休めるところをさ

す。清水の車宿りは清水の西門前にあつ

た。（謡・熊野）はや程もなくこれぞこ

の車やどり馬とどめ

二〇 下河原―祇園の南清水寺永觀堂の西

に当る。（謡・熊野）上なる黒谷下河原。

立出でて峯の雲花やあらぬ初桜の祇園林

下河原

一 真葛ヶ原―葛の生えている野原。

（謡・隅田川）聞くや如何に上の空なる

風だにも松に音する習ひあり真葛ヶ原の

露の世に身を恨みてや明暮れん

二 上毛の鴨川―賀茂川・加茂川。京都

市東部を貫通する川。左京区雲畑の山間

に発源。高野川を合して、さらに桂川に

入る。（謡・蟬丸）愛き音に鳴くか賀茂川

や（謡・賀茂）下は白川上は賀茂川（謡

・東北）山陰の賀茂川や末白河の（前大

納言公任卿集）霜おかぬ袖だに泣る冬の

夜は鴨の上毛を思ひこそやれ（伊勢大輔

集）寐せし水の上のみ戀くて鴨の上毛に

さへぞ劣らぬ（慶運法師集）夜と共に幾

重の霜が置そへむ鴨の上毛を波のこさず

は（和泉式部集）置く霜を拂はぬ程は押

なべて鴨の上毛の衣手をずする。起乍明し

つる哉ともねせる鴨の上毛の霜ならなく

に。

三 庭を清めのお僕―境内を清掃する老

下僕。（謡・田村）木蔭を清め給ひ候

は。いつも花の頃は木蔭を清め候程に花

守とや申さん

年久敷仕へ申。庭を清めのお僕

「聖光寺」について

にて候なり。有難や此寺は。常に

御法を説給ふ。貴賤群集諸共

に。覺鐘の響絶せずも。念佛三一五
フシセウ

味の道場たり下歌我等ごときの身

なれ共。悲願に争かもるべきや一七

上歌一六唯心の浄土はすぐに爰なれや

に此一五己身の彌陀と。聞くから

身をやがて此儘成佛などか。な※
か成

べきくワキ詞「いかに是なる
老人に尋ね

申へき事の候何事にて候ぞ
(貼紙)シテ「此方の事にて候か

一四 貴賤群集—キセンクンジュ。身分の低い人高い人を問わず多くの人々が集ること。(平家物語卷一)軒騎群集して

門前市をなす。(謡・誓願寺)貴賤群集の色々に袖を連ね踵をついで(謡・実盛)

一五 此處も己身の彌陀の国貴賤群集の称名の声(謡・西行樓)貴賤群集の色々に、心の花も盛んにて昔の春に歸る有様(謡・百萬)かざしぞ多き花衣貴賤群集する

この寺の法ぞ尊き(謡・賀茂物狂)行きかふ袖の色色に貴賤群集の粧ひも翻す袂なりけり

一六 覺鐘—本文に「フシセウ」とあるは「フセウ」「フショウ」の誤か。中国の古代に覺氏の作つた鐘。転じて釣鐘。

(謡・当麻)後夜の鐘の音、覺鐘の響称名の妙音の(謡・誓願寺)夕の鐘の声々に称名の御法覺鐘の響聽衆の人音(謡・初雪)げにありがたき弔ひの心もすめる折からに覺鐘を鳴らし声々に。(謡・隅田川)わが子の為と聞けばげにこの身も覺鐘を取りあげて(謡・敦盛)不思議やな覺鐘を鳴らし法事をなして(謡・高野物狂)或は覺鐘鈴の声、耳に染み心澄みて

一七 念佛三昧—「なかるべき」の誤か。念佛三昧—ネンブツザンマイ。一心に仏身を觀念する。または一心に仏名を唱える。(謡・誓願寺)念佛三昧に出て

ある人の(謡・当麻)念佛三昧の定に入り給ふ

ワキ「是は廻國の修行者にて候が。

清水の觀世音の告にまかせ。

清海の曼陀羅京極聖光

寺にあり。急ぎ參詣申せとの

御夢を蒙り是迄參りて

候。御案内を以て拜ませて給り

候へシテ「是は不思議の御靈告哉

當時第一の寶物にて候。先々

方丈へ御通り候へワキ「あら有難や

候。日頃の願望叶ひて候。楮清海

一七 争か—「イカデか」と読む。如何でか。

一八 唯心の浄土—極楽浄土は心を離れて他にあるのではなく、自己の心中にあるものであるということ。(謡・柏崎)己身の彌陀如来唯心の浄土。唯心の浄土と聞く時は(謡・春榮)涼しき道ならば唯心の浄土なるべし(謡・誓願寺)唯心の浄土とはこの誓願寺を拜む(謡・実盛)

己身の彌陀如来唯心の浄土

一九 己身の彌陀—己身は自分自身のからだ。己心に同じ。彌陀は浄土にあるのではなくて、却つて自分の心(身)になつてゐることをいう。大原談義に「極楽不遠而構萬億刹之西、彌陀在己心、而現一座蓮華之形」とある。(謡・実盛)己身の彌陀如来唯心の浄土なるべくは尋ねべからず。それは十萬億土遠く生まるる道ながらこれも己身の彌陀の國。

二〇 方丈—天竺の維摩居士ゆいまの居室が方丈であつたという故事から寺院の長老住持の居所。寺院の主な室。転じて住職。または師の敬称としても用いる。ここでは寺院の主な部屋をいう。(謡・東北)あの方丈は和泉式部の御休所。

二一 念佛三昧—「なかるべき」の誤か。念佛三昧—ネンブツザンマイ。一心に仏身を觀念する。または一心に仏名を唱える。(謡・誓願寺)念佛三昧に出て

ある人の(謡・当麻)念佛三昧の定に入り給ふ

ある人の(謡・当麻)念佛三昧の定に入り給ふ

ある人の(謡・当麻)念佛三昧の定に入り給ふ

の曼陀羅とは。いか様成謂にて

候やらん御物語り候へシテ「さ
らば

語って聞せ申し候べし語抑此清

海の曼陀羅と申は。人王六十

六代^三一条の院の御宇。大和の

國超昇寺の住侶清海上人^三
チヨセウ

。蓮の糸を集めて絹を織らせ

。九品浄土の曼陀羅を繪か^三
ニ

しめむと。長徳二年^三の頃か^三
ニ

。都に登り給ひしに。木幡^三の里^三
ニ

二一 一条の院の御宇一十六代一条天皇
の時代。一条天皇は寛和二年（一六四六
）御即位、寛弘八年（一六七一）崩御。

宝算三十二歳。（謡・小鍛治）一条の院
に仕へ奉る橋の道にて候。「一条の院の勅
使にてあるぞ

二二 大和の國超昇寺一和国生駒郡都跡
村にあった寺。また超勝寺。承和二年（
八三五）真如法親王の創建。此地は孝謙
天皇の内裏楊梅宮（ヤマモノミヤ）の旧
跡である。弟子豈演初代の座主職に任ぜ
られる。正暦年中清海本寺に入り念佛堂
を建立し超昇寺大念仏を始む。また、浄
土変相（清海曼荼羅）を靈作して安置し
た。のち漸く衰へ徳川時代に至って全く
廃絶した。（仏教辞典・東成出版社・昭
和十三年刊による）

二三 清海上人一常陸国の人。寛仁元年（
一〇一七）没。興福寺で出家し、のち超
昇寺に移ってから法華三昧を修し、念佛
堂を建立し、超昇寺大念仏を始めるな
ど、浄土往生の不断念仏を行なって同寺
で生涯を終えた僧である。（日本往生極
樂記による）

二四 九品浄土一クホンシヨウド。西方浄
土・極楽浄土・九品安養界に同じ。九品
とは極楽浄土の九等の階位。すなわち上
中下の三品に各々上生・中生・下生の三
等がある。（謡・柏崎）極楽の九品上生
の臺。九品蓮臺の花散りて（平家物語
卷三）九品の臺目の前にかかやき。九品
浄土疑なし

にて行暮しが。何國共なく

（貼紙）翁か
老人一人顯れ出。御僧の御手に

持せ給ひるは如なる物そと尋し
に

。是は藕絲にて織たる絹なり^三

。都にて畫人のすぐれたらんを

尋て。九品浄土の曼陀羅をゑが

しめんと有しかば。何都迄も

有まし。今宵の内に書て参

らせむとて迅に畫き清海に

あたへ給ふ。其時清海感毛^三
ニ

二五 長徳二年一西曆九六六年。一条天皇
の御代。

二六 木幡の里一山城国紀伊郡。いま京都
府宇治市木幡。古の大和路である。拾遺
集柿本人麻呂の歌「山科の木幡の里に馬
はあれどもちよりぞ来る君を思えば」
（謡・通小町）山城の木幡の里に馬はあ
れども

※給ひるは「給ひけるか」の誤か。

二七 藕絲一グウシ。「藕」は「ハスノネ
」。「ハス」「ハチス」ともよむ。蓮また
は蓮の根、蓮の茎または根茎にある織
維、はすの糸などをいう。したがって、
藕絲とは蓮よりひき出した糸のこと。（
謡・草子洗小町）釈教の歌の数々は蓮の
糸を乱る（謡・当麻）濁りにしまぬ蓮
の糸。蓮の糸を染めて掛けて乾されし桜
木

二八 感毛卓壁一卓壁は卓見の意である
う。自分の身にいちちはやく感じとり、正
しい見識を得ること。

「聖光寺」について

卓堅して御身いかなる人なれば

。かく有難變相を一夜の内に

(貼紙) とはなき後は出来
てあるなり

。畫がくむとはいふかしさよと

有しかば。あゝ愚也清海。汝仏
道

修行の志を感じ。九品浄土の

曼陀羅を一夜に畫き與ふる

なりと。音羽の山に飛去給ふ。

夫より末世に伝來して。今に

清海の曼陀羅とは申なり

ワキ「實有難き御事かな。清海

二九 變相―變相図。極楽の莊嚴、地獄の

相狀、そのほか仏教説話・經説などを圖

繪にしたもの。浄土變相・地獄變相・本

行經變相など。ここでは浄土變相図をい

三〇 實有難き―「實」は「ゲニ」とよむ。
(謡・身延) げにありがたき法の道。

三一 謂―「イワレ」とよむ。由来。由

三二 超勝寺―超昇寺に同じ。前述。

三三 平安城園寺―平安「ジョウオンジ」
とよむべきか。伝未詳。

三四 迎の事に委敷―「トテモのコトにク
ワシク」とよむ。

曼陀羅の謂は委く承はり

ぬ。さて超勝寺大和の國。又は

聖光

寺は平安城園寺共に等しからず

。何とて聖光寺に納る謂。迎の

事に委敷御物かたり候へ

クリ地
抑此聖光寺と申は。御本尊

は丹波の國。篠村八幡大菩薩の

御神体。鎮西聖光上人。

撰擇傳授の遺跡にて。則御直筆

の御影を残し置れし御寺なり

三五 篠村八幡大菩薩―篠村八幡宮は京都

府南桑田郡篠村字篠に鎮座。村社。応神

天皇・仲哀天皇・神功皇后を祀る。篠村

は保津川の右岸にあつて本國國府の所在

に接近し、加ふるに京都に程近い景勝の

三六 鎮西聖光上人―浄土宗鎮西派開祖。

鎮西上人正宗國師の諡号がある。筑前國

香月庄の人。應保二年壬午五月六日辰刻

誕生。七才にして仏門に入り、教義をき

三七 撰擇傳授―センジャクデンジユ。撰

擇とは撰擇本願念仏集のこと。二卷。法

然上人が九条兼実の求めに応じて、念仏

サシシテ
其後天正年中に。良阿上人

中興す。かの良阿上人と申は。

専修浄
三九

業の聖にて。春の山野にあそび
ては。四

方のにしきを詠やりてシテ奥
山に尋ね入

ても捨やらぬ身の爲につむ。た
にの

早蕨と詠じたりクセ唯暇初
地

言葉にも。厭離欣求の外は

なし。又折々は奈良の京。春日

の里に参りつゝ。信男信女を

引導す。浄土の願ひ昇からぬ

三八 良阿上人―伊勢国松阪樹敬寺の僧

天正十一年(一五八三) 聖光寺の堂宇を
再建し、青海曼荼羅を得て寺宝となす。
聖光寺中興の祖といわれている。

三九 専修浄業―センシュジョウゴウ。セ

ンジュジョウギョウ。専修浄行のこと。
ひたすら念仏を称え他の行を修めること
なく仏法清浄の行を修めること。

四〇 四方のにしき―ヨモのにしき。まわ

りのはなやかな春の景色はあたかも錦を
織りなしたようである。(謡・桜川) 山
花開けて錦に似たり

四一 奥山に尋ね入ても捨やらぬ身のため

につむたにの早蕨―出典未詳。俗世をの
がれ奥山に分け入っても、なお、世俗の
欲望を捨て切ることができず、食欲をみ
たすために谷の早蕨を手折る業深き自分
であるよ。この作者の持つ業を解脱した
境地を詠んだものに次のような和歌があ
る。新葉和歌集・巻十・釈教歌・中務卿
宗良親王の法華経品の歌を人のすゝめ待
りし中に「序品入ニ於深山ニ思ニ唯佛道」
の心をして詠んだ歌「山深み尋ね入り
てぞ迷ひなき佛の道はしるべかりける」
※昇からぬ―「卑からぬ」の誤か。

高間法眼と云人あり。歸依渴仰
の餘

りをや。我不思議の佛縁にて。
超昇寺

の曼陀羅を。秘藏して持たる也
。自他

の利益に備へかしと上人に奉る

シテ亦興福寺の衆徒の中に。
菊岡西

照といふ人。上人を招請し。

庭上の松のしづえに打掛て。

此曼陀羅を禮拜す。講説

時うつり聞人感涙を流し

けり。千早振神も御法を楽

四二 厭離欣求―エンリゴング。オンリゴ

ング。汚れたこの世を厭い逃れ、心から
仏道に歸依することを願う求る。(太
平記二〇) 厭離穢土の心は日々にはす
み、欣求の念時々にまさりければ。

四三 奈良の京―奈良の都。(謡・杜若)

昔初冠して奈良の京(謡・雲雀山) 奈良
の都の八重桜咲きかへる道ぞめでたき
(謡・采) 女げにや古に奈良の都の代々
を経て(謡・龍田) 古き名の奈良の都を
立ち出でて

四四 春日の里―謡曲の舞台としては、采

女・春日龍神・野守などがある。(謡・
杜若) 昔初冠して奈良の京。春日の里に
知るよしして狩に往にけり(謡・大仏供
養) 神も教えの牡鹿なく春日の里に着き
にけり(謡・采女) 過ぐればこれぞ奈良
坂や春日の里に着きにけり

四五 高間法眼―京の絵師高天法眼のこ

とか。版本・拾遺都名所圖會に「南都の
繪師高天法眼」とある。伝未詳。

四六 歸依渴仰―キエカツゴウ。仏の感得

に心を傾けて信仰すること。渴しては水
を思い、山に対しては高きを仰ぐように
深く仏道に歸依すること。(謡・吉野静
) 衆徒悉く参落し歸依渴仰に恵みをいだ
き給ふべし

「聖光寺」について

しみて。光りを松に春日山

四七 自他の利益―利益はその功德をい
う。みずからも救われ、他人にも功德を
ほどこすこと。

より。來現ましますば影向の

四八 興禪寺―奈良市登大路町にある寺。
法相宗の大本山で南都七大寺の一。藤原
氏の氏寺として、その氏神春日神社をも
管轄し、久しく盛大を極めた。

松と名付たり。今に其名を菊

四九 菊岡西照―伝未詳。
五〇 松のしづえ―「しづえ」は「下枝」
の意。したえた。しずえだ。(万葉集五
)梅がしづえに(万葉集九)しづえにの
これるはなは(万葉集一三)しづえにし
めをかけしが

岡の庭に験を残したり

ロンギ 地 〱實有難きおん事の。超

五一 千早振神も―「千早振」は神の枕
詞。(謡・賀茂)千早振神に歩み運ぶ
(謡・水無月)千早振神の忌垣も越えつ
べし(謡・翁)千早振神のひこさの昔よ
り(謡・逆矛)千早振神の祭早めん

昇寺と申は。今に舊跡有成覽

五二 光りを松に―「松」に「待つ」をい
いかけている。

委しく語り給へやシテ〱されば

五三 影向―ヨウゴウ。ヨウコウ。他にエ
ゴウ・エイコウのよみ方がある。神仏が
一時応現すること。(謡・弓八幡)あらた
なる御影向(謡・雨月)ありがたの影向や
返す心も住吉の。ありがたの影向や月住
吉の(謡・采女)春日山宮の峯に影向(

兵の回録にかゝりて。今は蔓も

謡・嵐山)この花に影向なるものを(謡
・大社)今月は神有月と諸神影向なり(

白露の。秋の稲葉に置かへて

〱名は消やらで超昇寺村に残り

謡・養老)諸天来去影向かな(謡・富士
山)富士浅間の唯今の影向(謡・江島)
弁才天影向の地

て曼陀羅はシテ〱九品の縁や九

五四 菊岡の庭―菊岡の「菊」に「聞く」
をいにかけている。

重の地〱花の都のシテ〱巷なる

五五 刀兵の回録―「刀」も「兵」も武器
のこと。「回録」は「回祿」が正しい。
火の神より転じて火事で焼けること。す
なわち、戦火によって焼失すること。(

此聖光寺に納まれり。一月天

平治物語)もし回祿あらば朝家の一大事
たるべし

に在時は。影萬水に浮ふ也

御身煩惱の業波静なる

ゆへに。心も清き海まさに

顯れたり。今宵は爰に念

誦して。一夜を明し給へとて。

方丈の室に入とみえて書

けすやうに矢にけり〱

五六 今は蔓も白露の秋の稲葉に置かへ
て―栄枯盛衰の世のならいをいったも
の。その昔威を誇った寺院の屋根も崩れ
果て、白露が今は蔓とちがって秋の稲葉
にやどっていることよ。

五七 九品の縁―極楽浄土の弥陀如来のお
引きあわせ。

五八 一月天に在時は影萬水に浮かぶ也―
一つの月が天に光り輝く時は月の光はす
べての水の上に輝き浮かぶものだ。萬水
とは多量の水気、多くの川・海の意に用
いられるが、ここでは海をさす。(謡・
融)一輪も降らず萬水も昇らず(謡・
山姥)昔の露より滴りて波濤を畳む萬水
(謡・蟬丸)月の影は天にかかって萬水
の底に

三 五九 煩惱の波靜かなる故に―衆生の心身を惱亂し、迷界につなぎとどまらせる一切の妄念をはらい除け、貪・瞋・痴・慢・疑・見などを超越して六識の波も静まる故に。

〳〵。至らぬ里はあらねとも。

詠むる人の心にぞ。すむと計に

六〇 心も清き海まさに顯れたり―仏道修行にひたすら精進する清き海すなわち沙門清海の前に、まさしくあらわれた。

波浪動する事少なく。

佛に向て座し居たり〳〵

後シテハ唯頼めしめじが原のさしも草。

我世の中に。あらんかぎりは

地ハ不思議や須彌のうてなより

〳〵妙成御聲の聞えつゝ。

「聖光寺」について

六一 書きけすやうに―「書きけす」は「掻き消す」のあて字。

六二 寂寞の扉に―シャクマク。ジャクマク。ものさびしく、ひっそりとした住居。(法華經法師品)「若説法之人。獨在空閑處、寂寞無人聲、讀誦此經典、我爾時爲現清淨光明身。」

(太平記一)上人寂寞の扉におはしまして妙典を誦誦し給ひける時(謡・芭蕉)山陰の寂寞とある柴の戸にこの御経を誦する

六三 月影の至らぬ里はあらねども詠むる人の心にぞすむ―月の光のとどかない里はないけれども、月をながめる人の心によつて光のとどかない所もあるものだ。まことに仏心の慈愛のように月の光は人の心の中にこそすむものであるよ。

(統千載和歌集・卷十)月影のいたらぬ里はなけれどもながむる人の心にぞすむ(古今和歌集・卷十七)且見れど疎くもある哉月影の到らぬ里もあらじと思へば

八四 八旬にたけ給ひたる老僧。鳩杖

に携はり。顯はれ給ふは有難

かりける。奇特かなワキハふし

ぎ

やな夢まぼろし共分ざるに

さも妙成し御姿のあらわれ

給ふは不思議さよシテハむかし

清海

佛道修行の。真の心を感じる

友に。九品浄土の曼陀羅を

畫き彼にあたふ詞「其故に來世

六四 定水―ジョウスイ。「定」とは、仏語で心を一境に集注させ無念無想の域に住すること。すなわち、澄みわたる静かな水のような境地をいう。

六五 一境すめば六識の波浪動する事少なく―仏語で「境」とは六境(色・声・香・味・解・法)三類境をいう。「六識」とは眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識の総称で六境を知覚すること。すなわち、ここでは一境を會得すれば、六識の波も静まるというので、心を一境に集注させ無の境地にいたれば心は静まり悟境に入るをいう。

六六 唯頼めしめじが原のさしも草我世の中にあらん限りは―新古今集・卷二十に清水の觀音の御詠として「なほ頼め標茅が原のさしも草われ世の中にあらん限りは」とあるを引いた。標茅が原は下總国にあり、さしも草の産地。さしも草は蓬で茎の短いものであるから、これを心の短い意にたとえ、「短気をおこさずひたすら我を頼め」といったのも。袋草子にこの歌の註として「物思ひける女の、はかしくしかるまじくは死なんと申しけるに示しける」とある。(謡・田村・船弁慶・藍染川)この歌の全句を引いてい

「聖光寺」について

信心を發し。彼曼陀羅を

六七 須彌のうてな―須彌壇。寺院の仏殿

拜まん事を願ふ。彌陀が本

の仏像を安置する壇。もと世界の中心に
聳え立つといわれた須彌山（妙高山・妙
光山ともいう）をかたちどつた壇をい
う。

願の念佛往生疑ひなし。衆

六八 妙成御聲―「妙成」は「妙なる」不
思議なまでに尊嚴な御聲。

生に是を利益せよとちから

を添ふるばかりなり地誓ひて

六九 八句にたけ給ひたる―「八句」はハ
ツシユン。ハジュン。八十才をこえられ
た。（謡・盛久）八句にたけ給ひぬと
見えさせ給ふ（謡・撰待）八句に及ぶ
母

し。音羽の滝の糸ながく。

七〇 鳩杖―鳩は食する時むせない鳥であ
るとし、これにあやかるため、老人用の
杖のにぎりの部分に鳩の形をつけたも
の。

願ひし玉も清水の邊り

にすんで。幾千代か。我さへし
らぬ

七一 奇特―キドク。不思議なしるし。す
ぐれたききめ。（謡・白髭）かかる奇特
に逢う事も唯これ君の御蔭ぞと（謡・
須磨源氏）さる程に天下に奇特の告あり
しかば（謡・石橋）目前の奇特あらた
なり

翁なりシテ機縁の水すめば

感應すめば感應の。月も

七二 佛道修行の眞の心―仏果に至るため
に仏の教えを修習しおこない、ひたすら
仏道の教えにはげむ心。仏果とは悟りに
達すること。

かぶは水のみか。和田の原。廣

き海にもうかぶ也シテへかれは
ママなり

彌陀佛の地へ智願海にや浮ふ

らんシテ我は水なり音羽の滝
の清き

地へ清き水にぞ跡をたるシテへ
水と

海とははなれ共地へ同じく清

き法性の空より成て。汝が夢

を覺すなりと。御聲も終

らぬに紫雲たなびきたち

まち干手の姿を顯はし

七三 衆生の結縁―シユジョウのケチエ

ン。「衆生」とは一切の生物。すべての
人物や動物。有情なるもの。「結縁」と
は成仏得道の因縁を結ぶこと。すなわ
ち、生かされている者達が仏縁に結ばれ
ること。（謡・嵐山）悪業の衆生の苦
患を助け（謡・兼平・白髭）一切の衆
生悉有佛性（謡・楊貴妃）いつを衆生
の始めと知らず（謡・鶴祭）有縁の衆
生を守る（謡・自然居士）我等與衆生

皆共成（自然居士）（謡・菊慈童）具
一切功德慈眼視衆生（謡・当麻）光
遍照十方の衆生を（謡・定家）隨衆生
性所愛不同（謡・春日明神）小磯の衆
生益なきを（謡・善界）但住衆生心想
之中（謡・身延）濁乱の衆生なればこ
の經は（謡・賀茂）法界無縁の衆生を
だに一子を思し（謡・兼平）仏衆生通
ずる身（謡・山姥）仏あれば衆生あり
（謡・車僧）仏あれば衆生もあり（謡
・舍利）仏あれば衆生もあり善悪又二
（謡・土車）仏は衆生を一子と思し（
謡・卒都婆小町）仏も衆生も隔てなし
（謡・鶴祭）（謡・百万）衆生のための
人なれば（謡・身延）衆生の愉樂も今
（謡・土車）不念佛諸仏念衆生

音羽の山へ。いらせ給へば旅

七四 彌陀が本願―仏菩薩が過去の世において発起した誓願。

僧は御跡をしたひ奉り千度

七五 往生―現世を去り浄土にて生まれること。(謡・源氏供養) 榊葉のさして往生を願うべし。

百度禮拜し〜して又

七六 誓ひてし―衆生救済の御誓願をもつた。

修行にぞ出にける

文化十四歳

丁子春

写之

此本何方へ参り候共早々

御かへし被下され候

文政三辰三月改之

今井 米七

七九 感應―信心が神仏の靈に通じる。(謡・和布刈) 蓋藻の禮奠感応の(謡・張良) 諸仏も感応(謡・弓張月) 地神も感応の海山(謡・源太夫) 人間の業なりとも感応などか(謡・賀茂) 感応あれば影向微妙の(謡・嵐山・朝長) 感応肝に銘する折から

八〇 和田の原―ワタのハラ。ワダのハラ。海原。海原。おおうみ。(古今集・旅)

わたのはら八十島かけて漕き出でぬと人には告げよ艇の釣舟。この他数多くの例が和歌にみられる。

八一 智願―仏法における弥陀が本願の悟りへの願ひ。

八二 我は水なり音羽の瀧の清き清き水にそ跡をたる―「水」と「音」と「瀧」と「清き」と「たる」(垂る)とは縁語。清き水は清水寺との掛詞。「跡をたる」とは仏語「垂迹」の意で仏菩薩の本体を本地といひ、その本体より種々の身を現して衆生を済度することをいう。意味は、我は清水の観世音である。音羽山から落ちる清い水、すなはち、清水の観世音がこの世に姿をあらわして衆生を救うのである。

八三 水と海とははなれ共同じく清き法性の―清水寺の観世音と沙門清海、清水の「水」と清海の「海」とは違うけれども、清水の「清」と清海の「清」とは同じく清く真如であり、悟心である。法性とは万有の本性で仏智の内容をなすもの。すなわち、無明を断つた悟りの心である。真如とも実相ともいう。(謡・清経) 無明も法性も乱るる敵(謡・葛城) 法性真如の宝の山(謡・高野物語)

法性随縁の月の影は八つの谷に(謡・源氏供養) 法性の空に至り(謡・藍染川) 法性の都を出でて分段同居の境に。

八四 紫雲たなびき―紫色の雲(念仏行者の臨終のとき、仏が紫雲に乗り来迎するといふ)が薄く横に長く引き。(謡・九世戸) 紫雲たなびき異香薫じ(謡・水無瀬川) 紫雲たなびき音楽聞え(謡・誓願寺) 紫雲たなびく夕日影(謡・国栖) 紫雲のたなびいたるを拜まい給うか(謡・現在七面) 紫雲たなびき四種の花降り

八五 千手の姿―千手千眼観世音菩薩の姿。千手観音は六観音(台密では、聖観音・千手観音・馬頭観音・十一面観音・不空羅索観音・如意輪観音の諸菩薩をいひ、東密では不空羅索のかわりに准提を挙げる)の一。千手観音は、普通は四十五、掌中に各一眼をもち、一手ごとに二十五有を救うといひ、頭上に九面または十一面がある。六道のうち餓鬼道を撰化する。千手は同時に無限の動作をなし、千眼は同時に一切の事理を知る。この菩薩の自在神力を標示したものである。

六

以上、謡本「聖光寺」の紹介とその成立について記し、その素材・役柄・構想・梗概を述べ、さらに全曲本文の鵜刻・略註をこころみてきた。

謡本「聖光寺」は、清水寺と京極聖光寺とを舞台としているが、現行曲のうち、京都清水寺が取りあげられている曲は「花月」「田村」「東岸居士」「三井寺」「熊野」である。しかし、「花月」「東岸居士」は、たまた／＼場所が都の名所清水寺であつたに過ぎず、「三井寺」は、清水寺に籠って親子の再会を祈っている母親が夢のお告げをうけ、三井寺で遂に親子の対面がかない、母子ともども郷里に帰り、やがて富貴の家となるというので、ここでは、清水の観世音の御利益によつてめでたく親子が再会できた喜びが謡われている。謡曲「聖光寺」は、清海曼荼羅縁起を中心に清水の観世音が仏道修行する僧に對して二度までも奇特をほどこすという構想であることは前にも述べたが、謡曲「田村」にみられる曲趣と類似している点が多く、曲の進め方、内容のとらえ方など、勝修羅三番の一つであり、花も実も兼ねそなえた名曲「田村」に勝らずとも、その味わいを同じくすることのできる曲として、清水の観世音の靈験を讃え、曲の盛り上りに成功した謡ものとして、番外謡曲「聖光寺」と番謡「田村」とを比較しながら論を進めてみることにする。

「田村」における前半は、清水寺縁起を説くのが主で、後半は、清

水寺の建立者である大納言坂上田村麿呂の幽霊があらわれ、凶徒を平げた軍物語をするが、最後に、これも観音の仏力であるといつて消え失せるのである。本曲の清水寺建立の由来は、今昔物語卷十一「田村將軍始建清水寺」語第三二「参考源平盛衰記」の清水寺縁起（南部本）にも記されているが、「聖光寺」の中にあらわれる「鳩杖に携り、八旬にたけたる老翁」とは、清水寺縁起の中で賢心なる人が夢のお告げによつて新京の東の山の中をおとずれ、そこで「老いて髪白し其形ち七十餘許也」という行叙にあい「ここに堂宇を建立せよ」と告げてかき消すように失せた清水の観世音である。

また、「聖光寺」において、清水の観世音の靈夢を蒙り、とまらぬ足に任せつつ旅僧が急ぎ聖光寺を訪れて、最初に声をかけたのが「庭を清めの老僕」である。そして、それが後シテの清水の観世音であり、清海曼荼羅のいわれを語り、方丈のいおりの中に入るとみえてかき消すように失せるのである。「田村」においても、東国の僧が瀧の響きも静かな清水寺に着いて、最初に尋ねた者は「いつも花の頃は木蔭を清め候程に。花守とや申さん。又宮つことや申すべき」と言い、両者とも前シテが庭を清めの人であるのもおもしろい。また、「田村」では清水の建立者田村麿呂、「聖光寺」では清水の観世音の違いこそあれ、最後は同じく清水の千手観世音菩薩に對してその仏力をありがたく拝する境地におわる。「御声も終らぬに紫雲たなびき、たちまち千手の姿をあらわし音羽の山に入らせ給へば旅僧は御跡をしたい千百度度禮拜して又修行にぞ出でにける」と「聖光寺」では結び、「田村」では、武勇を語る曲のクライマックスで、弓馬の道の所作をし、

合戦のはなやかさを存分に披露した後、「ありがたしありがたしや誠に呪詛。諸毒葉念彼。観音の力を合はせて既ち還著於本人即ち還著於本人の敵は亡びけり。これ。観音の。仏力なり」と観音の御利益に深く頭をたれているのである。しかも、両者とも後シテにおいて、過去を語るに於いての曲の高まりはすばらしい。ただ「田村」は武勇のさまであるから地謡と武勇の所作とが溶けあって、舞台のはなやかさと曲のたかまりは、見る者の心を捉えることが容易であるが「聖光寺」においてはその殆どが「語り」となっているので、「田村」のように修羅の巷の所作もなく、観客に訴えるところも少い。しかし、一貫して、清水の観世音の靈験を謡いあげているので、その演技がまことに重厚で、神の尊嚴をあらわし得るならば、この謡曲のもつ幽玄の世界に人々をひき入れることが出来るであろう。

謡本「聖光寺」の舞台となっている京都の聖光寺と由緒を同じくする浄土宗鎮西派の寺に、「はくさんの銀杏の寺」と呼ばれている奈良の聖光寺がある。奈良市鳴川町白山辻子にある寺で、本尊は同じく阿弥陀如来像で、鎮西山と号し、もと南都元興寺中の一庵であったが、建久八年鎮西聖光この地を留錫念仏道場とした。永祿一二年（一五六九）感蓮社応誉の代に現寺号を称し、承応二年（一六五三）照蓮社光誉伽藍を完成したといわれている。（全国寺院名鑑・全日本仏教会寺院名鑑刊行会・昭和44年3月刊による）

同じく「全国寺院名鑑」によれば、浄土宗寺院で熊本県に「聖光寺」と称せられる寺がある。この寺の本尊は阿弥陀如来・観音大勢至両菩薩で、寺宝は、善導大師・法然上人像である。竹林院と号し、開創

は寛永二年（一六二五）開山の然誉。宗祖法然によって独創された撰本願念仏の実践道場である。また、一説に加藤清正が熊本城築城のとき建立されたともいわれる。以上二寺を謡本「聖光寺」にちなんで付記した。

おわりに、貴重な研究資料をいただきました上にお忙しい御研究の中を御指導たまりました田中重太郎先生、参考資料をお貸し下さり、いろいろお教示下さいました柿谷雄三先生に、この誌面をおかりしまして心より御礼を申し上げます。

（本学専任講師・国文学）